

中高一貫校化への期待 両利きの授業

後藤 大

(百七期)

以下は東京桑野会の会報のために書いた原稿で、母校の140周年と中高一貫校化への期待を書いたものである。

みなさんは、日本という国の形が、これからどうなることを望んでいるだろうか。超少子化と超高齢化が進み、人口が減少し続ける。人口ピラミッドが逆三角形になっていく中で、どのような人材が日本に必要なのか。

個人的には、超少子化は解決のしようがない問題であり、労働人口の減少に伴う経済の衰退を甘受するか、移民を受け入れるのか（超高齢化は、超少子化を受けた結果に過ぎず、対策ができるようなものではない）。第三の道として、経済の衰退に抗おうとするなら、経済を活性化することができるリーダーシップがとれる人材が必要だ。

では、経済を活性化することができる人材は

どのような人材なのか。その答えは、何が経済を活性化する要因なのかを考えることにある。

経済は、市場における取引量が増大することで活性化すると仮定すると、既存の商品・サービスについて需要を増やすか、新しい需要を創造する商品・サービスを世に出すことで需要を増やすことになるだろう。既存の商品・サービスに対する需要は、超少子化を前提とすると、増加は期待できない（国内市場に限っての話であり、海外展開をしていけば、また事情は変わるが）。そうすると、新しい商品・サービスを創造できる人材が、これからの世の中に求められているのではないか。

と、日頃、スタートアップの支援をしている視点から、今の日本に求められる人物像を考えてみた。これは、あくまで個人の意見であって、様々な意見がありうる。ただ、ここで大上段にこのような話をしたのは、母校が創立140周年を迎えるとともに、福島県における公立の中高一貫校となるからである。

自分の子ども時代を振り返ってみると、小学校の高学年は学校に行きたくなく、中学校に進学するために特別な勉強など一切せず、中学時

代は、ろくに授業も聞かず、図書館に入り浸り、友達と帰り道にたわいのない話を遅くまでしていた。勉強をしると言われれば、したくなくなくなる天邪鬼な性格。東京で、塾通いに苦しんだ自分の子どもの中学受験の様子を見た経験からは、自分が牧歌的な子ども時代を過ごせたことはありがたいことだし、よく高校に入学できたものだと思う。それでも、母校の自由闊達なパンカラな校風は新鮮で、楽しい高校時代を過ごすことができた。

話は唐突に変わるが、東京都の公立中高一貫校の中等部に模擬裁判の授業で出かけたときのことである。模擬裁判も終わり、ざわつきが収まらない生徒に対し、先生から、東京都初の公立中高一貫校の生徒として恥ずかしくない行動をするように、と注意する場面に遭遇した。

中学1年生から高校3年生までの6年間、思春期の真つ只中で、子どもから大人になっていく（そういうえば成人年齢も18歳になった）後輩たちに対し、学校側の思惑を一方的に押しつけるのではなく、また、驕りや選民思想的な感覚を抱かせるのではなく、生徒が自由闊達に過ごせる環境を提供することはかなりの難事業だと

思うが、中高一貫校が実現する以上、開拓者精神をもって学校、生徒、その他の関係者（我々も含まれる）が新時代の安積を作り上げていくことを切に願う。

世はAI全盛の時代である。スマートフォンからアルゴリズムで選別されたニュースが流れてきて、多様な観点から物事を見ることができない人を育てるのではなく、他者の個性を尊重し、多様な意見に接し、コミュニケーションを厭わない、芯のある人材を輩出する中学・高校になってもらいたいと思うし、そこで友人や仲間と出会い、様々な経験をする事、同じ校風の下で学んだ先輩や後輩を得られることがかけがえない財産なのではないかと思う。

さて、ここで話が終われば、きれいにまとまる気がするが、以下蛇足である。両利きの経営ということが言われている。簡単に言ってしまうと、既存事業の深掘りと新規事業の開拓のバランスをとることが企業経営において大事だという話である。そして、新規事業の開拓をしていくためには、新しい商品・サービスを創造できる人材が必要だとして（ようやく冒頭に話に戻る）、中学・高校でどのような体験があれば

いいのか、私論を述べたいと思う。

これまでの学校教育が、既存の科目の深掘りという形で作られているのであれば、新規事業の開拓に相当する授業が必要ではないだろうか。少人数のグループの中でひとつの目標に向かって、自分やメンバーの個性を活かしながら、スモールリーダーシップと小さな失敗と小さな成功体験を数多く積み重ねて、合目的な思考力と行動力を養うプロジェクト型の授業だ。必ずしも正規の授業内ではなく、課外活動でも良いが、中高一貫校だからこそ、柔軟なカリキュラムが組めるはずであり、そのような体験を通じて、世の中を変えていく人材が輩出されることを期待する。

さて、ここまでが東京桑野会の原稿である。そこで、母校への一方的な期待だけではなく、自分に何ができるのかを考えてみたい。ちょうど昨年、広告写真や動画の撮影業を営む実家の事業を承継することになり、会社自体をDXしつつ、月に数回、郡山と東京を往復するようになった。そこで、たまたま郡山新事業開発プロジェクトという郡山市と事業構想大学院大学が提供するプログラムに参加する機

会があり、新規事業開発を体験することになった（このプログラム自体は、2024年度も開催されるとのことなので、もし参加する機会があったら、ぜひ参加してみたい）。新規事業開発自体は、AIの会社を共同創業したこともあり、初めてではなかったが、仮説を立てて検証して事業に落とし込んでいくプロセスは、何度やっても、失敗もあり、つらく、楽しく、そして面白い。

このプログラムの内外で、安積の卒業生との再会や出会いがあり、期が離れていても、安積の卒業生というだけでコミュニケーションがしやすくなる点は、とてもありがたかった。新規事業開発は、ユーザーのニーズを充たすプロダクトを考えると、そこからスタートするが、それを実現する旅路には、仲間が必要不可欠だと思う。その意味で、中高一貫校の後輩が、仲間と一緒に郡山で新しい事業開発ができる場を作り、育てていきたいと思う。

以上